誹柳

四編中

へ13
2928
11

胴房新話 以登家内喜（いとやなぎ）巻之十一

江戸　為永春水著

第六十一回

嬉しきものとある中にも夫婦和合揃ふて眼出度こと
らへ代を抱まし歌く影も形のものを思ふ男のあるなり
うん思はぬ人に添遂よとある女の心哀れにも物悲しく
あるうんかたに夫に先だち柳橋あけ方ねの我代は若き嫁
その身の柳に思ひし殿人衣食の旅より迎ふるが

へ 13
2928
11
昭和九 七月六日

教へし職ある二人の者の信切なる九年以上学びの初より
安楽にして何不自由も無き身となりしが剰へ遊あれ
将来に至り進歩の身を考へ出して果は気病と
なるのみか心も乱れ一寸になり何事も窮りなると
もなく武術の学問にし武術を修行し
志ありなどして書写の学病の様に疲れ給ひ
柳の業ト大きなる事も信切なる男史月数
見習ひ物つけお柳さん多游ぶ代の稽人骨病

悉くハよろしからせけるがお柳を元来親の身をまもる心
の婦聞へ一村一扶え記しつありとお持ヨ今朝子待
乳山の観光さん夜人市さんが行て其をきき
ぶら手遊さんの者供が来るある多く遊ぶる業ト
あい柳中と言ふやお熱しぶらう総閑をお生え茶ナ
一イ二なお柳観光さんが総お会じも見ずりかも
ニエハヨ仰しく今まで便りのなきのが無事の
寔お今まで柳く無くとめて発てもゆが変て

長ずる個々に行り夫孤ゞ出来く身分が仏教のしく
信義このゞョ御へ方ニ繋ぐゝ多へヨアノ親光さんの云ふハ
子とれを久しく別離て長と繋ゞ赤絵バッハ仏教ハ
モウ来くまた添の遠るとのゝ墨ぞろゝ必ず報ゞハ
良相ゆと帝さんを長くも郷云て お義ざりのヲカ壇
お興ひ子へ子へ実ふゝ御へ十二帝さんゞ武云さん
ものゝ子へそれふ遠ひ多と特しのみ程ゞ 仏教も紙
ゞハ良相ゞョ御へイエ それハ家愛 振命とお云ことサ

子へりゝ赤文ふ遠ひ多ハのゝゝゞ広長庶の方ゞ
紙書ふ さんの反紙をもひゝく書き動し紙仏教 様
扱をして置らゝ子へ御へ三紙さんの方ゝゝ広長人
下して紙を男と文婦ふ多ゝく小児さんを和食育
て長ゝと言ゝ お紙の反紙のゝゝ子へ郷サ和ハ今文
東さんの沙汰ゞ多ハゝゝと方ゝゝくものと方ゝゝくお
紙の人紙言ゝふ抜ゝ乳ハ多ハ和ハとゝふ 坊の涙ゝの
子を 言て書ゝと庶の乳ゞ伝切ふ世紙しん 五月

の女房に見世ぐるも出して安堵させて上げたいと存じ
のみ成ぐと金子ならまで頼みが御座りく私の主人方からも
困るぶらふと思って昔男ぐハト唯一の術へ老良夫の
仁平「イヤ此義は御不沙汰致しました 柳「ヨヤ仁平
さん能お出なさいましたサア此方へお這入なさいまし 仁「ハイ
トキニお嬢ご子様よさんの御病気ハ如何でござりますか 柳「
ハイお嬢も元気ぐ有って困りますが今も稽古と
力を付て居ますのヨ 仁「ハテそれハ困つたものでござ

くその気の開く様に仕て上げたいと全体此様子から懐ッてきつひ
気強ぐから病も出るのでさうもくと存じるが絵ト談の
様に居り升う可笑な話をどつしく面白く千代の療
を聞かせて居る中にお柳ハ気早く薬代を持参
菓子を添て仁平の側へ来まして 柳「サア一ッお上がり
なされまし 側にお仁平も美味とござりません 仁「イヤ最早い
御馳走で御代り今日ハまだ上方の紙唯一を
して悦ばせなやせうト 懐中より紙包を出し 仁「サア此はまだ薬湯

まるうろ氏おりゆ人まり
お見ふうけるが玄汰おゆ中
遠の物るまけに上方うろ作兵衛さんの親類の
ろ氏
おあと氏家下る舞さんを相原ゆ二商賣
させくまるの渡見と上方のお坊さんの法えをまを
ろとのまけい更だい作兵衛さんの物をお相とを
ゆ物どが生代りるい地面の一ゆ所も分ん金ろり

ろり二軒の商賣ろう猫ゆ第ゆ不淫お米の物屋
ひゆ月と云のどろう陸ろう永知義ろも買ひどくい
どぶだいませんろゆへ物相しんでゆ物ゆ世ん張ゲ
出ゆ物るゆめどぶだいませうそうん氏物ゆ病ゆ作兵
まもゆのヲゆどもあ綱の世張ハ老んもゆまもんハにへ
ゆろく会ゆ上方ろ〳〵ノ長岡の舞さんゲ来ゆ長ご物ゲ
先へ知ろどゆ来ろゆのどろう氏ゆ作ゆ今ゆ来ろう
その男世よく着ろ石ろべゆろうサ物作兵衛

きんの祇園でも一生連添男を持ぬうちハつけ役と
いふのハ此方が通りつて居ますハ客の好に永約束が相
談の仕様もあれやせう此様な路経気の利た好男と
かう見合なしつてハまんざら居でもありますまいと思ハ
るる子上方に居る中も祇園の藝子が惚て気が
遠り寄ノ縞の内の閨女が一時に三人惚く見世物の
喧嘩が出来て様の好男ぶりう世帯にもある
まいこ花子が辰巳仕出のおあ入おの気に入ねかえらん

アノ、モシ 手「ヘエ仁平さん貴女人の此所へ来るの嬢マア止て
え お思ひなさいナ発くもマア此通りの病人で居ますから
お前さんの相談も出来ては仕ませんけれど遊んでお出
の上方に此様な気乳しい宅を見られるのハ私の
おかげでござりますから子供「それハマア姉さんも此様な
知って髪も乱れしたお茶ても湯へも這入るのでも堀も
お流ひでさんしのが何様しん上方でさんぞうの様く
お出の時ハ部屋へ会させるものでござんすまいからマア

今日もお人が此頃お出の事ハえもなく染ハツてお長
長右衛門ナ 仁「ナニサ兎角悪るいのハ自分の息子振付あそばれて
お在所も江州上の女中の乳母をしたより八笑
しく桑姉娘ぶらぶら遊ぶかうとはわかしも
若すかしひるのは身ひのサそうして実の身を途中で
こうれて先へ仕ぬけて来るのざうろ今更
りのゆわれるのの子 子「まあきくなぞ存じて
もお聞なかつたらおハヨお柳さん其屋風に

長右衛門さんお長ナ 折「アレ聞いて居ませうヨ 長「
アヽヽ気の毒な其れで居る事も自分ウト御身の
所へ参りの事門口に立て悉く見れバお物の周章
て床の側の屏風引廻し長右衛門お守代ハ床を
の中へ隠れて息も出さず縮こまる 仁「アヽさ
咄人見て居るのも有様ト外の所へ二人連
格子戸あけて内へ這入り 忠「仁平の女房ハイ御免なさいまし
仁平さん 仁「イヤお清さんやまあよくサアお上り遊ばせも

氏子へ宣ふお出なされまして
しく乗へ乗るゆゑお柳様見那方
せんと名残支へ聞と云へ人の新を見く聞りせ
きまりし男を一向お聞元も世武年乳の知らぬ
新の新る中ふ柳方たらぐ人遠ひうと嫌ひ
聞れば心武ちげ兄例の礼義陸奥武
源出しく煙草の内武心分屋風の中へ入り寝やふ
お千代の耳へきやけべお千代をうきき屋風の

義より き取き再度お柳と呼き合醤油吉も
笑へわば志賀本の宿の二人の考もよりかりし
男も宝ぐ考けて内も途切ろぐ取るれば
互ふ呼き合意合へお柳さん今月ふまぐ来ぬ
帰りまんョお柳上さんぐ分板も病乳ぐ
ぐぐ分色まと二三日の中ぬ来りませうと言れて
お柳の屋風武意出柳へさるへ乳の毒だ
ざへまんぐ知て歩下まし分板も病ぐふさぐ

奈良と京都にハ盛が正銘といはしませぬから今日ハ
拙も失礼を致しました 化へイエ此痛中の事ゆゑ
お気遣が匣子いがれまさ気りませんおかた
に別れまして二人ともに帰りける
お柳とお千代が邂逅しハ何故ぞといふに
上方からの郷里に居たころ他家より下りし
男ハ則ちお千代が情人の壺吉なりその
委しきハ次の章に読分るべし

第廿二回

再説お千代とお柳の二人ハ志良木の店の人を振捨
て郷里に居たよしみ上方から下せし男も残りし後家の
娘なる心なれバ柳へ姉上さんマア如何して此方へ来たりやア
如何も壺吉さんに遠ひなのとおらが何も人でありて壺
きんべいなのゝ子へ今へ私きやア如何でも如何からして居る
のごとおらへヨ柳へヲヤ如何しても居るといへバエ子へ大将如何な私に
崇りてなるのごとおらへバ柳へヲヤ如何故へ子へ如何故とおもふが

先達も達さんが七八年程前まで
云て居ふも同様に成て居る約束して出て行き
今まで少しの暇もなかりしに今申一段ふ達さんの為
の人が来らうと思ふと帰って仕まふんぞといふ
紀州の狐が狐が和歌脇しふ来るのぢゃ都合
悪ひる紙ぢゃそーん日中紀州来る
もんの支ぢも和歌今来さのく達さんふ遠ひるのと思ふ
ゲ子即ち紀州の出ぢ
悪ひうぢゃと思ふゲ子オエ和歌ハ男ハ
達さんマア達さんでも今日ハ傍人がある多もいん
ぜよ知らぬ和歌して帰るとの人多もあら人が実
西ぢ達さん来ば微禄人ぞ素門して貴ハ武士ぢ
下ッ方ば達ふ為て其そふ委ぢの人多ハ人ト
云て御もぢ製ひ養り称「弟」紀州ぢ来と達ふ
御ぢ子、文とも山地へ下って来く帰上さんを居ると長崎
知れ悪ひうぢ 冷方寄ふ志良表の病の者のりハ

何せん婦人さんの処とも不知舞さん迎人新さんお茶のおやア
あへう文へイエ然しやア あへョと方は居る中さ他云ふさん
あまれ
よ新さく私とも知らぬよ舞さ迎人新さ此地へ下ッさ
のぶ〳〵迎来さんさ迎ひあれば彩人不実あり まこと
さんあ〳〵私の彩あハ云ひ七八年掛ぐ 裏面岸へ
ぶく お出の義さ君も関もしんお帰りぶ〳〵面倒の
私の対の上を唱さ学くも知れるうちのや似寄の
女ぶ 彩人も まぶ〳〵ふと男門く舞さ迎入りさ下ッて

来ハ為まんとも ぶふ〳〵 新ぶろ 学も不解 ぶごハ 孫ウ
ぶ迎ウ 武板の ふ〳〵 ぶ子へ 彩へ ヲゆく 文ぶろ子 彩さんの
久〳〵不忘さ ぶれく お在の 来さんさ 他さ人衆舞
ふ〳〵 学ふと 新んぶ 紙ぶろ〳〵アア 紙ぶやア あませ
ぬうお 新彩も 迎さの 新ぶ 彼人衆 舞ふ〳〵しんお
ぶと ぶ ぶ 彩ぶハ あります チへイエ文 ハアア 紙
ぶれども 来さんさ 迎ひ あのぶと 新衆 ぶもも
あのぶ 他平へ 舞さ 迎入 新さ 山地へ下ッ ぶ

不安な仕方で悔うしのびやゝあるうち私や嫁しくッ
人ゝのあのハ物へ〳〵まくハアア結ぎかれども婦上さん
ゲ光明おのぐハ出さんでハあらうかとおもぐハあの
久そで紙の長ッ子紙〳〵考へて寄うよ出さんざ
らふとちふョ示論く光明の人ゲ出さんでなれバ
光明の出さんハ物れしくさのぐらふと業ぐられゝゆく
仰さ人成高まる気ハあへョ出後出さんゲ物ぐ
死ぐとうんゆくも第と遠ひ合かれバ私や尼あも

命ゝくはまのョ物〳〵アサ婦上さん手紙を心知ひるの
をおあでのョそうんアアあの婦ふもの松合あへるる
る紙おのぐ文実のの出さんの出さんハ物ふ
気ふ物さのゲ悔うしひ紙ゲ悔うの出さんふ
物くも出さんでなかれバ高ふ高ふのとおでハ流
ふ物紙も仕方ゲあります出さんハ子アかるも知恵紙ゲ可
嫌そうごとお男ひ命ハ気ふ叫ハあへるも婦恵しく
家内の流る格ふして婦上さんも心強くあるのゲ結ハ

ありまさせぬうと諫められたるも お千代
が情が多き女の情郎なる杉山先生の角力先ざの
ものに流れて人並勝れた生涯も文盲も書る義の深
き実にありと驚しに八お柳も同じく俱流潔清と云義が
八重なりけり

然れども赤お千代の情人忠義が八年強て裏治郎
へ引取りしより下総作倉の在人の作兵衛の
御代遠江方へ出りの途中まで初編二

編に記して骨宿に八初せ寄せられるお千代
とお柳のまさるも知れず赤忠義と杉山中
元絵師紙筆とて江方へ出りし源の八骨宿も
いまだ知せる人なし 柳さ 杉山中 忠義 作兵衛 骨宿
ふ見りて為時再会 江戸 金人下りしに成果して源の
先せ人もの心なるせる人なし

爰に浦國の本家和泉軒紙筆の中の
も志賀寺といふ大伝の支配人作兵衛 赤

源兼の出生なりしが極老年に及びて商売を止め
死けれ家業なる故支配武家に分られ其人国家の
たるの身分
なりて上方の地武行ものもたるべく強人の
病ひがちなりしゆえ孫の弟も養子仕度の
為娘の婿に極子を取ふ迄養子せり亦
きたれ
者八三年程以前に病死心の叶ひ不図記憶なりし
より商ひを廃し内外の武士に仕官の根性なる極ふ
なり此家も娘のみにて男子依兼養子その途中

あれば者柳橋の故千代が方の親戚なる者伝聞せし
なり亦故千代の人小児を養せり亦云清が上方に
て後二年程仮武乃ざりしに初めの子供
さて人実義の如なりと元姫故に幼女なる姫義
と八年も経ふ遠く姫云来り上人生る以六十二才なる
代八二十三にて才の性なる加く仕事清が一生武なるも
ハあるべしと心ふ思ひ切しふ後上人生り後便り武
せば猶多ふ才の義者なせと云別さしべ大概

郷右衛門とも情人等にわかれ高三郎は捨しわが子の身代り人なれ
ば捨しがさまざまに出生の小児の手代を召出して悪者を打くて
下せしとぞ郷右衛門は悪者を打捨て連て登り来りあそび
の子を連て郷里へ帰り作左衛門に郷にゆづり跡まで遊び手の
おりしめを思案し久しくお村も親類の兄弟に至る
又悪者をばしらべ道くまでもなく寺まで送りて
此に定まりし一祖武門二人を継ぎて此家へ下さるお種
や先は万事も様子に出してお村の孫金に継

孫右衛門と名乗る手前の様子此事も重ねて孫子に
ハ久しひ継ひがたき縁者ひの思案が付ず後に此家
二人を孫金へ下さると是を知らす殊更に継手
アゝ伯父さんも同様久しく下さる人が様子此家が下ら
ざるの事ば相続も何も入ぬ事なり此身は家業を継て
も此度孫金へ下さるは此家なり此身が代りに下され
のぞみて重ね家業を大切に勤めてまづ繁昌して
作金の親子の子孫を永く続きて此身の亡後も

業柱を吊ッて黄ハ為れば為ッてと云ふてお稽古
遊ばせ為ッてと言ッ（イヽエ）私やア伯父さんもお出でゝ
居ればこそまん兼さんも無人も亡き伯父さんを
偲ぶ為ッて書く示細父さんが別て仕まふと心細
くッて仕方ない（ハヽ）ハヽ代りよ雪吉と一同よ下ル
心細ひ思ハ為ッて（イヽエ）でも家滅亡よ伯父
さんが重ふが為ッて思ハ私が別れぞ〳〵よ
思ふまんものヲ（ハヽ）為る程年の功為ッの心でお親の
亡き後よ久〳〵弾く為さ伯父を親とも頼む者ハ
ふ例よ慶ゆ為ッて思ふ為ッと為ッて
頼むとも〳〵和合れば別ふ心細ひ為ッて
紙為ッて（ハヽ）紙柱（ハヽ）それでも是さんが別れぞ〳〵
まさんものヲ（ハヽ）為く私やア別でも伯父さんの為ッて
ふ為ッて段〳〵為ぬ（ハヽ）トキニお稽古年の功為ッて
〳〵吉柱の成功せ業ッて心が定まる為ッて
為ふ為ッて私よ代ッて世話成る私ッて言葉

紙衾しのぶの人見堂中くろう相撲氏遠さ多りぞ金子四
郎や右の方くろう張弓せり極めく堂くろう義文六
衾の多りとも張金人下ッて勝負の雲氏ちど名極ま
しく右種の方の家名と子代の方の家業と三軒前
の世張氏一人ぐく勢めて世界の第一多くう衾ハ一郎の
右種氏遠させ世家氏張金人ハ下せーども

胴房
新話 以登家内書巻之十一了